

# 頭陀袋⑥〇 平成二十九年六月号

発行 中山かんのん

## 恩林寺

中山中学下、電話三四一一四五



### 売茶翁の話

黄檗山萬福寺は中國風のお寺として有名ですが、隱元禪師が煎茶、番茶の習慣を伝えられ庶民の間に普及したことはあまり知られていません。隱元禪師に付き添い日本に渡った獨湛禪師は黃檗山第四代を繼がれるのですが獨湛禪師は隱元禪師と同じ故郷、福建省の出身であります。福建はお茶の産地としても知られています。独湛禪師の弟子、売茶翁について触れてみたいと思います。

売茶翁は肥前蓮池（佐賀県佐賀市）の生まれ、城主鍋島家の御典医、柴山氏の三男として生まれ、十一歳で肥前龍津寺化霖について得度します。十三歳で黃檗山萬福寺に入り独湛禪師に参じました。二十二歳で陸奥に行き雷山で苦行をしたのち故郷の肥前に帰つてきました。五十七歳の時、師匠がなくなると龍津寺を法弟、大潮に譲り京都に戻ります。六十一年の時通仙亭を開き、自ら茶道具を担い、京の大通りに喫茶店のような簡易な席を設け、禅道と世俗の融解した話をしながら客をもてなし、人の在り方、人の世の生き方などを説いたといわれています。相国寺の和尚はその内容を書き残したらと進めたのですが、「仏弟子の世に居るや、その命の正邪は心にあり、事跡には非ず、そもそも袈裟の仏徳を誇つて世人の喜捨を煩わせるのはわしの持する志とは異なつておる。」と、述べたという。七十歳になり、十年に一度は故郷に帰るという約束を果たし、突然自ら還

俗。（坊さんを辞めて俗人に還る）自ら高氏を名乗り号を遊外としました。

気が向かなければその日は店をしまう、といふような気楽な生活でしたが貧苦の中、喫茶する人のために煎茶を売り歩く毎日でした。

八十一歳になつた遊外は売茶業を廃業、愛用の茶道具すべてを燃やしてしまいました。（私の死後、この道具たちが後世の俗人たちにわたくつて辱められたら、道具たちも私を恨むだろう。だから、お前たちを火葬に付してやろう。）という思いであつたようです。その後、揮毫（字を書く事）によつて生計を立て、八十七歳で蓮華王院（三十三間堂）の南にある幻々庵で息を引き取りました。売茶翁を偲び黄檗山萬福寺には売茶堂があり、煎茶に親しむ茶人によつて守られております。

### お施餓鬼のご案内

恩林寺の毎年一大行事（お施餓鬼）は黃檗宗県内寺院のお寺さん方に協力いただき本年も左記のとおり務めさせていただくことにいたしました。皆様ご多用中のところ恐縮ながらぜひともお参り下さいますよう、ご案内もうし上げます。（なお、別紙案内状を同封いたしました。お参りの方は六月十八日ころまでにお寺にお知らせください。）

記

### お施餓鬼法要

日 時 六月二十五日（日曜日）午前十一時

法 要 恩林寺本堂

終了後 岐阜市芥見 真聖寺住職

村瀬正光禪師の法話があります。  
ひきつづき斎座（お昼ご飯）があります。